

よきことを、よきひとへ。

被災地復興に取り組む人のための業界新聞
http://www.rise-tohoku.jp/

発行所 NPO 法人 HUG
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-10-9-8F
http://www.h-u-g.jp e-mail: info@h-u-g.jp

東北復興新聞

無料 第7号
月2回 発行

創刊 2012年(平成24年)1月16日月曜日

2012年(平成24年)4月23日 月曜日

復興庁

復興支援ロードマップ発表

官民の多様な担い手の連携を促進

復興庁のボランティア・公益的民間連携班および男女共同参加班は、今後3年間の復興にあつての課題や目標と、目安となる取り組みをロードマップとしてまとめ公表した。

ロードマップでは「被災者生活支援」「遠隔避難者支援」「復興まちづくり」「産業再生・就労支援」「多様性への配慮」の5つの分野において、今年4月～2015年3月までの3年を1年毎に分割しそれぞれ目標とする

ロードマップで示された分野・フェーズごとの目標		
	2012年度末まで	2013年度末まで
被災者生活支援	・仮設住宅での孤立を防ぐ ・見なし仮設・自宅避難者の孤立を防ぐ ・復興住宅への移行に向けたコミュニティの形成	・仮設→復興住宅等への移行の見通しが立つ ・引越支援などによるスムーズな移行 ・空き住戸が増える仮設住宅団地での孤立防止
遠隔避難者支援	・避難先でのコミュニティ形成 ・被災者支援情報への確実なアクセス	・安定した生活の場への移行のめどが立つ ・引越支援などによる新生活へのスムーズな移行
復興まちづくり	・住民による合意形成組織の設置 ・専門家などの支援によるまちづくり計画の策定	・復興計画の確定 ・復興まちづくりの進行
産業再生・就労支援	・雇用創出とマッチング支援による就労の場づくり ・仮設商店街のにぎわい創出や被災地の産物の販売促進等による産業の維持	・先行する地区での商店街や工場等の再スタート ・産業の本格復興の再開
教育・医療・福祉	・子供や高齢者、障害者等に配慮ある取り組みの実施(平成25年度末まで) ・ひとりひとりを大切にした復興計画の策定(平成25年度末まで) ・分野ごとに必要な施設の適切な設置計画の策定(平成25年度末まで)	・復興住宅等への移行が完了 ・復興住宅等でのコミュニティの形成 ・復興住宅等での孤立防止 ・いきがいの創出

状態を設定。実現へ向けNPO等、企業等、自治会等、市町村、都道府県・国の5つの担い手が各期間に行う主な取り組みを例示している。

「被災者生活支援」においては、仮設住宅から復興住宅へ生活の場が移行していくのにあわせ、住民によるコミュニティ形成を軸に、各担い手が生きがい・仕事づくり等の取り組みで側面から支援していく。「遠隔避難者支援」では被災者生活支援と同様の取り組みに加え、避難先の県や団体との連携を

県や国レベルで進めて行く必要性が明示された。「復興まちづくり」では今年1年で住民合意形成、来年以降は計画実行の推進という時間軸の中、2014年度は企業等における「1村1社」的スキームでのまちづくり参画といった案も示された。「産業再生・就労支援」においては来年度に商店街等が仮設から本設に移行していき、まちづくりや

数字から見る被災者

① 応急仮設住宅戸数
② 借り上げ民間賃貸住宅・入居戸数
③ 県外への避難者数

岩手県
① 13,984戸
② 3,649戸
③ 1,575人

宮城県
① 22,095戸
② 26,050戸
③ 8,462人

福島県
① 16,683戸
② 25,465戸
③ 62,736人

※①4月2日現在、国土交通省調べ。②4月17日現在、③4月11日現在、ともに復興庁調べ

復興庁のボランティア・公益的民間連携班および男女共同参加班は、今後3年間の復興にあつての課題や目標と、目安となる取り組みをロードマップとしてまとめ公表した。

「被災者生活支援」においては、仮設住宅から復興住宅へ生活の場が移行していくのにあわせ、住民によるコミュニティ形成を軸に、各担い手が生きがい・仕事づくり等の取り組みで側面から支援していく。「遠隔避難者支援」では被災者生活支援と同様の取り組みに加え、避難先の県や団体との連携を

官連携 産学

ICTを活用した 営農技術、開発始まる

4月末、宮城県亘理(わたり)郡・山元町に、産官学連携による1万平方メートル規模の最先端大規模園芸施設が完成する。

これは農水省が「被災地の復興のための先端技術展開事業」「新食糧供給基地建設のための先端技術展開事業」を、NPO法人GRA(代表・岩佐大輝)に委

託したもの。農業・食品産業技術総合研究機構や宇都宮大学など10の研究機関と連携する。

この事業では、ICTを用いて、いちごやトマトなどの園芸作物の最適な生育方法など、農家の収益を高める営農技術を科学的に検証。具体的には、日照量や二酸化炭素濃度、室内温度

【特集】へ



山元町山寺で建設が進む最先端大規模園芸施設(4月初旬)

などの環境制御や、生産支援システムの導入を試験し、高品質ないちごやトマトの生産を追求する。得られた知見は、多くの農家に共有され、地域復興に役立てられる。



いわて連復の鹿野代表理事(中央)と朝日生命保険の芝田支社長(左)、亀井北上営業所長(右)

同センター鹿野代表理事は式に出席した約30名に対し「2年目もオール岩手で全国のNPOや企業と連携していきたい」と決意を表明。震災後1年間で北上市等と「復興協働支援協定」を結ぶなどし、行政、企業、NPOが一体となった支援事業を実現してきた同セン

ターだが、職員も4名から6名へ増員、更なる業務の拡大を目指す形となる。大幅に拡張された新事務所では、1階を事務所、2階をセミナー開催や支援団体の交流スペースとして活用できる。復興関係者のための岩手県内陸部の新たな支援拠点となりそうだ。

いわて連復 北上市に新事務所を開所

岩手県内の復興支援へ新拠点

NPO法人・いわて連復復興センターは10日、北上市の「きたかみ震災復興ステーション」内に設けていた事務所を、朝日生命保険相互会社より1年間無償貸与を受けた隣接するビルへ移転した。

県、国それぞれのレベルの複数の担い手が一同に会し、目標設定や行動計画を策定する円卓会議の設置等を提案している。

連携強化に向けた円卓会議の設置を

いづれの分野においても住民主体の復興をしくみ面で市町村、国が支えつつ、企業は本業を活かした参画、NPO等はそれぞれの専門分野においてニーズとフェーズに即した支援を行う形が示された。その実行においては各担い手の連携強化の必要性が強調されている。連携するためのスキームとして、住民コミュニティにお

ける「まちづくり協議会」等の住民による合意形成組織の組成、および市町村、県、国それぞれのレベルの複数の担い手が一同に会し、目標設定や行動計画を策定する円卓会議の設置等を提案している。

「支える人を支える募金」です。赤い羽根。

東日本大震災の被災地における支援活動を支援するため、「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」を運営しています。

●寄付や助成のお申し込みはこちらから
www.akaihane.or.jp

●6月1日(金)から第8次の助成応募を受け付けています。
締め切りは6月29日(金)

問合せ先

中央共同募金会 企画広報部(ボラサポ担当)
TEL: 03-3581-3846 (FAX: 3581-5755)
support@c.akaihane.or.jp

ボラサポ公式 Facebook ページ
「ボラサポ facebook」で検索。耳寄り情報を毎日更新中

ボラサポ・メールニュース
登録はwww.akaihane.or.jpから

赤い羽根の中央共同募金会





復興のきら星④

このあたる

今野 当さん (32)

民宿「とまり荘」経営者、東北人魂「岩手グラウンドプロジェクト大船渡チーム」プロジェクトリーダー

経営する民宿が津波で浸水。愛する大船渡の町も大きな打撃を受け、「震災直後は再建は考えられなかった。家族を連れて別の場所へ行こうとも考えた」という今野さん。しかし消防団の一員として復興支援活動をしながら徐々に気持ちを立て直し、昨年4月11日に宿の改修工事を開始、事業再建のスタートを切った。

2千万円の借金を背負ったの業務再開は6月。震災の影響で資材が

不足し修繕を重ねながらのスタートとなったが、復興関係者の需要もあり順調に宿泊客数は伸び、すぐに売上は

事業再建を果たし、子供たちのために新たな挑戦

震災前と同水準まで回復した。借金返済目処がたち始めた今年の3月に転機が訪れる。Jリーグの小笠原満男選手をはじめとする高校サッカー部の同級生とともに、子供たちのためにグラウンドをつくるプロジェクトを立ち上げることにした。「満男に資金調達まわりを任せ、現場は俺らが」と、候補地の洗い出しや地権者との折衝、市・県や施工業者との調整などを同級生の有志グループで進め、わずか1ヶ月で構想を計画レベルまで落とし込んだ。

自分もサッカーを通じて多くを学んだので、1日も早く実現させたいと語る今野さん。「課題は多くこれから勝負でもやるしかありません」と力強く語ってくれた。

イベント・インフォメーション

●企画展「復興の先覚者・後藤新平～いわて復興偉人伝～」

【日時】2012年4月28日(土)～6月10日(日) ※5月26日(土)、31日(木)は休館【会場】岩手県立図書館4階 企画展示コーナー【内容】関東大震災後、帝都復興院総裁を務めた後藤新平を中心に、岩手の先人たちが、過去の災害に際して発揮した知恵と行動力を、所蔵資料で紹介。【主催】岩手県立図書館【問い合わせ】TEL:019(606)1730【URL】http://www.library.pref.iwate.jp/oshirase/info.html#kikakuten

●シリーズ「気仙沼はいま」第1回「気仙沼は『海と生きる』ことができるか」

【日時】2012年5月8日(火) 19時30分～21時【会場】日本国際ボランティアセンター

アセンター(JVC)東京事務所(東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル6F)【内容】昨年10月に「海と生きる」と題された震災復興計画を策定した気仙沼市で計画されている防潮堤を巡る一連の動向を紹介。同時に、海と街が共存できる方策も議論。【参加費】1000円(JVC会員、マンスリー募金者は500円)【その他】会場は、国産間伐材のヒノキ材を床材に使用しており土足禁止。当日、スリッパ持参。【申し込み・問い合わせ】メール、電話、FAXのいずれかで前と連絡先を明記の上、申し込みを。TEL:03(3834)2388 FAX:03(3835)0519 Email:arita@ngo-jvc.net【URL】http://www.ngo-jvc.net/jp/event/event2020/05/kesennuma-01.html

※イベント情報随時募集しています。掲載ご希望の方は press@h-u-g.jp まで。



これも仮設ですか？

女川町に建てられた、プライバシーなどを考慮した設計の多層型仮設住宅。設計は被災住居の分野でも活躍する坂茂氏

気仙沼大島ランフェスタ

「楽しむことが支援になる」

5月開催

宮城県気仙沼市の有人島大島で5月27日に行われるマラソンイベント「気仙沼大島ランフェスタ」が、県内外で話題になっている。漁業と観光業が二大産業の大島は、津波と火災により甚大な被害を受けた。漁業はカキとホタテが主力のため収穫は数年先に。頼みの観光も、船着場周辺に集まっていた土産物屋や宿などの観光施設がほぼ全滅したことや、他地域から島の復旧度合が分からなかったことが影響し、昨年一年間の観光客数はほぼゼロに近い状態になっていた。そこで、多くの人に足を運んでもらい、島の現状と魅力を知ってもらう機会をイベントの開催を決めた。島の道路整備は、開催の決定を受けて県からの協力もあり、急ピッチで進んだ。参加者はハーフマラソンまたは10キロのコースを、海岸線沿いの景色を楽しみながら走る。ゴール地点のイベント会場では、島の人々からのわかれ汁やまぐろの兜焼きのサービス、気仙沼などからも出店のある各種屋台、アーティストのライブなど、さまざま

な催しが行われる。また参加賞には苗木が用意される予定。参加者それぞれに植えてもらうことで、島の緑化はもちろん、木々の成長を見に再訪してもらうきっかけにしたいと考えている。もともと大島には、「つばきマラソン」という大会があったが、これは行政主導のイベントで、島民は積極的に運営に関与しなかったという。しかし今回は自分たちで立ち上げた実行委員会が主体。委員長の白幡昇一さんは、大島の観光協会会長でもある。東京からスポーツイベントやウェブサイト制作のプロなどが数名、アドバイザーとして協力しているが、主体となる実行委員約20名はす



大島の美しい眺め(震災前)。イベント参加者は、これから自然と産業が復活しゆく島への再訪が楽しみになるだろう

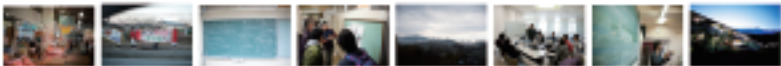
べて島の住民、そのほとんどが高齢者だ。調整事項は数多くあるが、よく話し合い団結して準備を進めている。エントリーの締め切りは5月6日(インターネット)、5月10日(郵便振替)。詳しくは問い合わせ先http://oshima-runfes.jp またはTel 0226(28)2285。

編集後記

今年のGWは、9連休を取って東北を周ることにした。桜を追いかけ、岩手から更に青森へ。青函フェリーに乗れたら北海道まで行ってもいいし、帰りは秋田から日本海側を戻ってもいい。今年はタイミングが合わずまだ一度も満開の桜を見ていない。季節を追いかける旅というのも、日本では少し珍しい贅沢なのではないかと思つた次第だ。震災が起こつて、初めて陸前高田という地名を知つた。その地に松林があつたことも知らなかったし、年間に百万人が訪れる名勝であることも、恥ずかしながら知らなかった。陸前高田の町を訪れ、一本だけ残つた松を見て、なぜこの地に震災が及ぶ前に来ようと思わなかったのか後悔した。南の島やカジノに行く代わり、なぜ一度でもいいから足を運ばなかったのだろう。松島の島々、北上川の河畔、浄土ヶ浜の海岸、いまなお美しい風景が東北には残るが、もう見ることも出来ない景色もある。いつか行こう、の「いつか」はなかなかやつてこない。東北へ行こうじゃありませんか。もう東北へ観光に行くのは、不謹慎でもなんでもありません。桜を追いかけると、海の幸を堪能するもよし、日本酒を愛でるもよし。百聞は一見にしかず。今の東北を観て、楽しんでいただきたい。(T)



http://h-u-g.jp/



NPO 法人 HUG

Projects

東北復興新聞の発行による中間支援プロジェクト
メディア連携による東北スタディツアープロジェクト
大槌町卒業アルバム復興支援プロジェクト and more...

Our Mission

HUGは、世の中を良くするために世界中で頑張っている人や団体を、情報発信等のコミュニケーションの分野で支援する中間支援組織です。素晴らしい人や取り組みをHUGが媒介となって世の中へ届けることで、人と人が笑顔でつながり助け合う社会の創造を目指します。

About Us

NPO 法人 HUG
東京都渋谷区代々木2-10-9-8F
代表理事：本間典雄
理事：松澤淳一郎、金田素人
E-mail: info@h-u-g.jp